

## ■ 巻頭言 ■

## 夢の途上

森内 浩幸

日本小児感染症学会理事長

唐突ですが、私は医学部卒業後すぐに青年海外協力隊に参加しようと、6年生になって隊のオフィスを訪れましたが、「研修医を済ませてからが良い」と言われて追い返されました。その心は二つあって、まず一つには「数年に一人君のような医学生や研修医が来るけど、役目を終え帰国した後で行き場がなくて困っている」と言われました。卒業後直ちに母校のどこかの医局に入るのが当たり前だった時代です。「風来坊は歓迎されない」ことを踏まえての老婆心だったのでしょうか。もう一つは「卒業仕立ての医師なんか使い物にならない」という、至極尤もな理由でした。

そんな私でしたので、もともと研究には興味ありませんでした。研究を志す同級生が「一人のフレミングの方が一万人のシュバイツァーよりも多くの人を救える」と言った時に、青年海外協力隊志望の私は「フレミングは一人いれば十分だけどシュバイツァーは一万人必要だ」と返しました。

医学研究を志すようになった切っ掛けは、WHOで仕事されていた先生の講演があるからという理由で参加した学会での出来事です。講演の後、フロアで偉い先生方に囲まれていた中に大胆にも割って入り、「WHOで仕事するには何が必要ですか？」と質問したところ、「若い頃の数年間やってみたいということ？それなら特別な資格は要らないよ。もし長年に亘って仕事をしたいのなら、MPHを取った方が良いし、どっかの大学の教授になれるくらい感染症についての実績が要るだろうね」と答えてくれました。その当時、私はMPH (Master of Public Health) というのが何なのかも全くわかりませんでしたが、少なくともこれ以上学生になる気はなかったので (実は大学院には進学していません)、「研究か、やってみようかな」と単純に考えました。

1988～1990年に国立仙台病院 (今の国立病院機構仙台医療センター) ウイルスセンターで呼吸器ウイルス研究を行った後、1990年から米国NIAIDに研究留学しました。いろいろ

な経緯があって ECFMG を受験して留学先の NIH の中の Clinical Center で ID fellowship に乗った感染症臨床のトレーニングを受けました。NIH だけではなく、DC やボルチモアの大学病院をいくつも回り非常に濃厚な経験でした。

臨床と研究の両輪で過ごす段階になり、もともと行っていたヘルペスウイルスの研究から HIV に鞍替えしました。理由の一つは、Clinical Center で AIDS 患者を受け持っていた際に、NIAID 所長の Tony Fauci 先生が無茶苦茶多忙なスケジュールの中でも必ず病棟回診に時間をかけていた姿に敬服したことです。Fauci 所長直下のラボに移り、HIV 研究と AIDS の臨床研究にリクルートされた患者さん達の診療を行う日々を過ごした後、1999 年に帰国し母校の小児科教授を拝命しました。現在はロンドン大学衛生・熱帯医学大学院との連携大学院でもある熱帯医学&グローバルヘルス研究科教授も併任しています。

果たして当初の目標に到達できたのか？長崎大学熱帯医学研究所と共同でベトナムのコホートで母子感染や呼吸器感染の研究を行うようになり、熱帯の地での診療や研究を目指す若い人たちへの教育の一端を担うようになり、そして WHO の仕事 (SAGE) にかかわらせていただくことが内定し、ちょっとずつ近づいているのかなと思います。とはいえ、まだまだ夢の途上です。

この度、本学会の理事長を拝命するにあたり思ったのは、「若い会員の先生方の夢は何だろう」ということです。子どもの感染症について、病原体、宿主 (特に免疫学的側面)、公衆衛生などのさまざまな観点からアプローチし、子ども達を守ってあげたいという気持ちで入会された皆さんの夢を叶える後押しができる学会を、一緒に作っていただけると願っています。

\* \* \*